

# 一 般 演 題 抄 録

## 21. 骨形成能からみた部位差の比較検討

朝村真一 磯貝典孝 田中英俊 藩宝華 上石弘

近畿大学医学部附属病院形成外科

骨形成において、主要な役割を果たすのは、骨芽細胞である。その骨芽細胞は、軟骨細胞、筋細胞、脂肪細胞などと共通の多分化能を有する未分化な間葉系細胞に由来すると考えられている。間葉系細胞が、骨芽細胞への分化能を獲得すると、それらは(前駆細胞=Osteoprogenitor cell)と呼ばれる。そのOsteoprogenitor cellは、骨膜部や骨髄内に存在する。そこで、今回、骨膜より遊離する細胞(骨膜細胞)に着目し、その部位と週令における骨形成能を比較した。

動物は、自家繁殖犬(ラブラドル)の①前頭骨②橈骨③脛骨の3部位より骨膜を採取し、さらに、

8, 22, 44週令の犬を用い、細胞数及び、ALP活性を測定した。

部位別の検討では、前頭骨に比較して、長管骨の骨膜細胞が細胞数、ALP活性ともに、高値を示した。

週令別の検討では、細胞数、ALP活性ともに、週齢に伴って減少傾向を示した。

細胞数、ALP活性は、camubium layerに存在する間葉系細胞の細胞密度に相関すると考えられた。

近年、骨髄中に多分化能を有する間質幹細胞を用いた研究が盛んに行われている。今後、骨膜細胞と骨髄細胞の比較検討を行う予定である。

## 22. 性同一性障害患者の分析

真鍋幸嗣 海賀和宏 日下志巖\* 人見一彦 上石弘\* 花田雅憲

近畿大学医学部精神神経科教室

\*近畿大学医学部附属病院形成外科

日本で性転換手術(性別再判定手術)が開始されたのを契機に当科でも生物学的性と自己の性意識との不一致に悩む(性同一性障害)患者が受診するケースが増えている。こういった患者の診察を行っていくにしたがって性同一性障害という疾患が非常に様々なパターンを呈していることがわかった。今回、我々は当科を受診した性同一性障害患者の生育歴、家族歴、現症、などを集計し検討した。

結果

### 1. 患者の分類と年齢

14名の患者の内訳はMTF(Male to Female)は9名、FTM(Female to Male)は5名。初診時年齢はFTMはMTFに対して比較的早期に受診する傾向がある。

### 2. 職業

FTMに比べMTFの定職率が非常に低いのが目立った。

### 3. 子供の頃の遊び、および性的指向

MTFでは一定せず、FTMと比較して相当な偏りが見られた。これは逆にFTMにおける性の自己認知の確立とその不変を特徴とする結果といえる。

### 4. 不登校の有無

FTMでは全く見られないが、MTFは6名に認められた。

### 5. 自傷または自殺企図の経験

MTF、FTMともに高率に認められた。

### 6. 内分泌治療、および外科的治療の既往

内分泌治療はMTF、FTMともに半数以上が施行済み。外科的治療はMTFの1名が国内で性転換手術を施行していた。

まとめ

MTFは社会適応の悪さが目立ち、FTMは発症が早期で、性自認に揺るぎがないといえる。